

物理学は誰のもの？

「サイエンティスト」という言葉が生まれたのは、19世紀も半ばのことだ。それ以前、たとえば英国の王立協会の活動を支えた会員の多くは、ジェントルマンとよばれる地主階級の人々だった。ボイルの真空ポンプの実験にしても、王立研究所の金曜講話にしても、なにより物理学は彼らにとってエンターテイメントだったのだ。

ところが科学はやがて制度化され、物理学者たちは大学などに職を得て、専門教育が行われるようになる。学術雑誌を基軸とする、贈与経済の体系も構築された。研究成果を論文として投稿すると、同業者の評価を経て、評判や信用という見返りが得られるのだ。コミュニティは特有の文化を形づくり、そこに「素人」はいなくなった。

そして今日、目ざましい発展を遂げた物理学は、社会をあらゆる面で支えている。だが人々はそのことを十分認識しつつ、物理学を自分とは縁遠いものと感じている。学校での「物理離れ」はもはや常套句だ。映画などの「白衣をまとった得体の知れない人物」といったステレオタイプの背景にあるのは、物理学者に向けられる盲目的な信頼、権威への畏怖と、漠然とした不信が入り混じった眼差しだ。

物理学を近寄り難くしている要因に、学問としての体系

性や抽象性、数学に基づき厳密さや客観性を重視する言説などがある。確率的にしかいえない事柄や、ほかの研究者たちによる検証が待たれている事柄であっても、マスメディアや一般の人々が期待するのは話題性であり、白か黒かの明快さだ。ともすると取材時の発言が思わぬ伝え方をされたりして、お互いに不満を募らせてしまう。

だが、こんなすれ違いの関係を見直す機運はいま、芽生えつつある。サイエンスカフェという対話の場は、日本でもすっかり定着したようだ。Zooniverseのようなクラウドソーシングの試みは、科学研究の現場に一般の人々が新しい形で関与する機会を生み出している。そして福島第一原発事故の際には、放射線量を測定し統計データを比較するという科学的な姿勢で、人々の不安と向き合った物理学者たちがいた。SNSに端を発した対話の広がりや、乳幼児の内部被曝線量測定や、高校生による居住区域の線量測定の論文として結実した。専門家と一般の人々が同じ目線の高さで向き合えば、互いに本当の姿が見えてくる。物理学は再び人々に寄り添い、ともに未来を築いていけるはずだ。

誌編集委員会